創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫（報告2）

― 科目「子どもと表現Ⅰ」ビデオで示す事例からの学び ―

吉　田　若　葉

はじめに

本稿は、本学紀要第35号において発表した『創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫－科目「子どもとことば」での試み（報告１）－』（本稿では報告１とする）に引き続いての報告である。現在筆者が担当している科目は、「子どもとことば」と「子どもと表現Ⅰ」である。本稿では科目「子どもと表現Ⅰ（演習）」での試みを報告して報告２とする。報告１では、学生の意識と保育現場での実習から養成過程における問題をあげ、授業内容の工夫の必要性を述べるとともに、養成過程で今求められているものは何かを考察し、授業のあり方を探っていった（註１）。学生にとって実習は、子どもを知り保育の楽しさと大変さを実感する場であり、学校での学びと実践が結びつく場である。学生が、授業や実習でどのように学びを深めていくかは、当然学生自身の意識と比例してくるが、同時に学生に関わっている教員の指導力も大いに関係してくる。年々、目的意識や積極性が希薄で問題解決能力の未熟な学生が多くなってきている現状から、養成過程での授業のあり方が問われてきている。本稿では、演習としての活動とビデオで示す事例からの学生の学びを考察し、創造性豊かな保育者養成を目指す授業のあり方を探っていく。

Ⅰ「子どもと表現Ⅰ」での授業のねらい

「子どもと表現Ⅰ」は、１年前期で１単位の演習科目である。本学での「子どもと表現」の科目は、担当者によってⅠ・Ⅱ・Ⅲと分けられており、筆者は、音楽的な表現活動を中心とした授業を進めている。幼児期の活動は様々な領域が絡み合ってくるので、保育者には常に子どもの育ちを総合的に捉える視点が求められることから、本授業では、音楽的な表現活動を主活動とする中で子どもの育ちを考えた活動の展開を学べるように授業の工夫をおこなっている。

教授要目の、授業のねらいは、「表現」の領域が、豊かな感性を育て表現する意欲を養い創造性を豊かにする観点から示されていることを踏まえ、「音楽的な表現活動を中心とする事例を取り上げて進めていく。学生自身が表現の楽しさを実感して、子どもと共感できる保育者を目指しながら保育者としての役割と援助について学んでいく。」（註２）としている。

授業は、45分１コマを２コマ続きで行っている。授業では、子どもと共感できる保育者を目指し学生自身が表現の楽しさを実感できる内容にするために、保育現場で筆者が実践し子どもたちが実際に楽しく積極的に参加した活動を取り上げている。そして、授業の最終日に、子どもたちの活動の様子をビデオ視聴している。本稿では、学生が、子どもの様子を通して、授業で実践した活動を

再確認していく過程を報告していく。授業でのキーワードは、創造性・探求的姿勢・解放・共感・楽しさの実感である。

Ⅱ　創造性と探求的姿勢

目的意識や積極性が希薄で問題解決能力の未熟な学生が多くなってきている現状から、養成過程における授業内容をいかに進めるかは、教員の大きな課題である。本稿Ⅰで、授業のキーワードとして創造性・探求的姿勢・解放・共感・楽しさの実感・をあげたが、創造性と探求的姿勢については、報告１のなかで、養成過程で今求められていることとして、探求的姿勢の重視と創造性の育成の２点をあげた（註３）。探求的姿勢の重視は、保育現場での保育を省察する保育研究の重要性から、養成過程においては、まず探求する楽しさを実感して探求的姿勢を培うことが必要であるとの考えからである。創造性の育成については、《幼稚園教育要領》と《保育所保育指針》で創造的で個性ある人間を育成する教育が求められている（註４）ことから、保育に携わる保育者自身が創造的でなければならないとの考えからである。

報告１でも述べたが、創造性についてはマズローが唱える自己実現の創造性（註５）の観点にたっている。自己実現の創造性とは、自己を発見し、自己改造を続け、人間として優れた存在になっていくことである。このことは、当然保育者にとっても重要なことであり、保育者には、常に自分の保育を省察し、保育を見直して成長していくことが求められる。日々の保育を省察していくには、いろいろな角度から自分の保育を探求する姿勢をもって、自己を発見し、自己を改造していかなければならない。自己実現の創造性は、保育者としての成長にも不可欠なものとして求められているのである。このことを踏まえ、授業では限られた時間の中で、できるだけ学生自身の創造性を刺激し、その過程で探求的な姿勢が養われるように授業内容を工夫し展開している。

Ⅲ　解放と共感と楽しさの実感

授業でのキーワードの解放と共感については、子どもの表現に重要な意味をもつと考えているので、学生自身にも解放と共感の重要性を十分に理解して解放と共感を実感できるような活動を取り入れている。

《幼稚園教育要領》と《保育所保育指針》では創造的で個性ある人間を育成する教育が求められているが、マズローは、（註６）個性の発達は自分流の独自の成長発達がなされることであるとして、自分流の独自の成長発達がなされるには、人として必要不可欠なもの（安全・愛・承認を得ること）が満たされていなければならないと述べている。つまり、子どもがその子らしく成長するためには、何よりも精神的な満足が不可欠だということである。そして、自分らしく成長するためには、自発的で、表出的で、ありのままの自分を受入れて自然であろうとすることが重要であると述べている。それは健康な子どもには簡単に達成できるものであり、そのためには、抑制・自己意識・意志・コントロール・文化変容・威厳などから解放される学習の必要性を述べている。

子どもがその子らしく成長していくには、自発的で、解放的で、自然であろうとする子ども自身

の内面的なことと同時に、個人の自由が尊重される環境が望まれるが、個人の自由を主張すれば、集団とのかかわりが問題となってくる。集団において個人の自由が尊重されるためには、個々が、自分のことだけでなく、他人の自由をも尊重していかなければならない。他人の自由をも尊重するには、他人の気持ちを理解する必要がある。子どもたちにとって、個人の自由が尊重される環境は、結局、他人への思いやりをもって自分自身の感情をコントロールする内面の問題となるのである。

思いやりについてゴールマンは、（註７）思いやりのもとになるのはラポール（信頼関係）であるとして、すべてのラポールは共感から生まれるものであると述べている。そして、自分の感情を把握できる人ほど、他人の気持ちも理解できると述べている。また、他人の気持ちを感じるカギは、声の調子・身ぶり・表情などの非言語的メッセージを読みとる能力であることも加え、子どもは大人の反応を模倣しながら、共感する感性を育てていくことも述べている。また、共感する感性の育ちについてスターンは、（註８）人の感情の基本的な部分は、親密な交流の時間に形成されると考え、「自分の感情は共感をもって受け入れられている」とわかるプロセスが決定的に重要であると述べ、それは、相手の気持ちを感じとって共感する「肯定のメッセージ」によって理解されるのであって、模倣とは違うと述べている。

解放も共感も、基本的には自分の感情をコントロールすることに繋がることであり、子どもが自然体でその子らしく自分を表現していくには、精神的な安定と、解放的な環境と、共感する感受性を学んでいける環境が望まれる。このことは子どもに限らず、学生にもいえることであり、創造性豊かな保育者養成を目指す授業において、解放と共感を学生に実感させる必要性があると考えている。音楽は、いろいろな機能をもって人の心に働きかけ、感情と深くかかわることができるので心理療法にも用いられる。この点で、音楽は解放と共感に大きくかかわることができる。したがって本授業では、子どものために計画された音楽的活動を通して、学生自身が楽しく解放と共感を実感できるように計画している。

Ⅳ　ビデオで示す事例からの学生の学び

授業では、主に筆者が保育現場で実践してきた活動を取り上げており、授業最終日に「子どもの表現を引き出す導入とことばかけ」と題して、筆者が保育している活動のビデオ視聴を行っている。ビデオに示されている活動は、授業で体験している活動を含む7事例（幼稚園４歳児）である。学生は、ビデオの映像を見ながら気付いたことを記録用紙に記入していく。記録の項目は、〈導入の工夫〉〈子どもの表現〉〈子どもの表現を引き出す工夫〉の３項目で、視聴後、ビデオを見ての〈感想〉を書く。子どもの表現の欄には、興味・刺激・発見・個の表現の４点から見るように指示してある。

本稿では、ビデオで示す７事例の活動内容と、その活動の授業での展開（内容によっては授業で行っていないものもある）と、子どもに実践しているビデオでの展開を述べ、事例ごとに①活動内容②授業での展開③ビデオで示す展開として３項目を示している。なお、②授業での展開の記述内容は、活動終了後に学生が書いた活動記録の感想から抜粋して挙げたものである。③のビデオで示

す展開の記述は、学生のビデオ視聴記録用紙からの抜粋で、学生の視点で捉えた内容を挙げたものである。したがって②と③の項目から、学生が自分自身の体験と併せてビデオの子どもと保育者の様子から何を学び取っているかを知ることができる。

事例１．マーキング「クレヨンのダンス」

①活動内容

・「クレヨンのダンス」（作詞作曲・吉田若葉）の曲中の３タイプの曲を聴いて、感じたままをクレヨンでマーキングする。

・歌の時は、選んだクレヨンを見せ、ダンスの曲になったら、音楽に合わせて線を描く。

（ねらい）・マーキングすることで心の解放をする。

・３スタイルの曲を感じ表現する。

②授業での展開

・「クレヨンのダンス」の曲を聴いて表現する。

・打楽器の響きが消えるまでマーキングをして線画を描く。

・表現された線画の線で囲まれている空間に好きな色を塗って画面を創る。

・自分たちの作品を自由に見て回り、いろいろな表現ができることを知る。

（感想）・線は思いのまま描けて楽しかった。いつの間にか熱中していた。

・リズムに合わせて自然と線を描いていたので不思議でおもしろかった。

・夢中になって線を描いていた。気が付くと手が青色になっていた。子どもはもっと楽しいのだろうと思った。

・細い線、太い線、薄い線、濃い線、まとまっている線、いろんなところにいっている線どれも重ならない線などそれぞれでおもしろかった。

・クレヨンを使ってめちゃくちゃに線を描いてすっきりした。心身が解放されたと感じた。

・色を塗っている時無心になれて、気持ちがよかった。

・線を描いて色をぬるだけなのに楽しかった。みんなの絵がいろいろな形にみえた。

・できた絵は、みんな描いた人らしさが出ていたので、自分のもそうなのかと思った。

・線の重なり合っている部分に色をぬるだけで、「線」から「絵」になっていって楽しかった。本当にどれも違っていて、人の感性や表現はおもしろいし、すごいと思った。

・ピカソになったみたいで楽しかった。

・どんな色を使おうか考えて塗るのが楽しかった。

・線を描くことでも、クレヨンの色を選ぶ楽しみ、音に合わせて線を動かす楽しみ、そして重なった部分を、また色を選んで塗る楽しみと沢山あって飽きないし、一つのことからすごく広がった遊びができると思った。みんなそれぞれに個性がでていた。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）・クレヨンを持って見せながら、「クレヨンが踊りだす」の歌詞をとりあげ「クレヨンはどんなふうに踊るのかしら？」と声をかけ、子どもの興味を引く。

（子どもの表現）・クレヨンを踊らせる３曲は集中して聴いている。
・歌いながら腕を回して楽しそうに踊っている。
・子ども一人ひとり表現が違う。
・曲を聴きながらテンポやタッチが変化していった。
・友達の作品に興味を示し楽しそうに見て、感想を述べている。

（表現を引き出す工夫）・「どんな線ができるかな？」と子どもの表現に保育者が関心を示す。
・曲に合わせてクレヨンを動かしている時に「どんなダンスでもいいのよ」「すてきね」「おもしろいダンス」などの声かけをする。
・曲が変わる時にクレヨンの色を変えるよう声をかける。
・一人ひとりの線画を全員の前で紹介することで刺激し合う。
・４名から６名のグループで全版模造紙に描いて楽しみ、作品を見る。
・繰り返す度に、曲に親しむので表現が豊かになっていく。

事例２．手遊び「ゆびのおさんぽ」

①活動内容

・「ゆびのおさんぽ」（作詞作曲・吉田若葉）の歌にあわせて手遊びをする。
・擬音を楽しみながら替え歌を創る。
・子どもと１対１の時は、子どもの名前を入れて子どもの体に触れて遊ぶ。

（ねらい）・手あそびをしながら、擬音の表現とリズムを楽しむ。
・リズムをとる手の形と動きを意識して活動する。
・替え歌を考えて創造的遊びを楽しむ

②授業での展開

・筆者が子どもと入浴中に即興で歌ったところ、子どもがとても喜んだことからできた遊びであることを話す。
・①での（ねらい）を理解して活動する。
・友達と向かい合って、目を見て、笑顔で、オーバーアクションで表現する練習をする。
・擬声音が子どもたちにとって、とても身近に感じられる表現であることと子どもの感性と密接にかかわるものであることを知って、替え歌を作ってみる。

（感想）・今まで、普通に歌を歌って振り付けをしていたが、今度からは「子どもに分かりやすく」をモットーに歌いたい。

・目を見ることは、すこし照れたが、とても楽しい気持ちになれることが分かった。
・歌が可愛くて楽しかった。
・指を使っていろいろなことができることに気付いた。
・歌いやすくスキンシップがとれるので保育園で是非やりたい。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）　・保育者がして子どもの興味を引く
（子どもの表現）　・擬声音を楽しむ
・友達が替え歌を作っているのに楽しんで参加している。
（表現を引き出す工夫）　・手の開き方、指の指し方に気付かせる。
・パパンパン・トトントンのリズムを楽しく打って示す。
・替え歌を考える時は子どもの輪の中に入って「次はどこへいくの？」「どんな音？」など子どものイメージを具体的にことばで表現できるような声かけをする。
・子どもの考えを紙に書き留めて、次への意欲をもたせる。

事例３．タイミング「キャッチボール」

①活動内容

・円か扇形の隊形で椅子に腰掛け、立っている保育者が移動して、子ども一人ひとりとキャッチボールをする。
（ねらい）・保育者と１対１でボールをやり取りするコミュニケーションの楽しさと、それぞれの子どものテンポでボールを受けるタイミングを楽しむ。
・子どもそれぞれのペースでボールを受けるタイミングを楽しんだ後に、音楽に乗る楽しさとボールが自分たちの輪を飛んで移動していく楽しさ、友達との一体感を味わう。

②授業での展開

・学生全員（60名余り）で立って大きな輪をつくり、１班８名が交代で保育者役になり、名前を呼び合って、あるいは音楽に合わせてキャッチボールをする。
・保育者役は、リズミカルにボールを受けるタイミングを子どもたちが感じ取れるようにオーバーアクションで表現する。
（感想）・ボールの投げ合いで、みんな子どもみたいに笑い合えて本当に楽しかった。
・たかがキャッチボールだけど、子どもたちが喜ぶ気持ちがよくわかった。ついフフフッと笑ってしまった。
・自分の番が回ってくると自然と笑顔になっていた。
・先生（保育者役の学生）がくるのを目で追っている自分に気付いた。そして取る用意を

していた。

・一人ずつ声掛けしながらキャッチボールするのもいいと思った。

・みんなで輪になってすると楽しみが倍になると思った。言葉がなくてもコミュニケーションがとれるのだと思った。

・待っている間、先生の言った(活動前の説明)とおりで、他の人のやりとりを見ていたので驚いた。

・音楽をつけると、待つ間も口ずさむことができた。

・音楽に合わせたのがとても楽しく、これこそが解放と共感だと思った。

・キャッチボールは、たんにボールの受け渡しではなく、心の受け渡しだと思った。

・目が合ったことを確認してから投げないと、相手が戸惑ってしまうことを学んだ。

・投げ方で気持ちの伝わり方が全然違うのに驚いた。笑顔で投げると笑顔で返ってくるし、無表情で投げると無表情で返ってきて驚いた。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）　・子どもの名前を呼んで渡す。

（子どもの表現）　・友達の様子をニコニコと見ながら自分の番を楽しみに待つ。

・楽しそうに叫んだり足をバタバタしている子が何人もいる。

・どの子もボールをキャッチした時に嬉しそうな表情をする。

・受けるのを失敗してもみんな笑っていて、活動を楽しんでいる。

（表現を引き出す工夫）　・円形になり、お互いの様子を目にしながら刺激を受ける。

・子どもの目を見てボールの受け渡しをする。

・「もらって」でボールを受け「ポン」でボールをなげるという動作とことばで、ゆったりとした２拍子のリズムに乗れるようにする。

・保育者に注目している子が多いので、保育者はオーバーアクションで、リズムに乗る動きのモデルとなる。

・歌ったり曲に合わせたりする。

事例４．体の緊張と弛緩「マリオネット」

①活動内容

・「マリオネット」（作詞作曲・吉田若葉）の歌を歌った後、マリオネットをイメージして４拍子８小節のリズムに合わせ、手首、肘、肩、首、腰、膝、足首の順に力を抜いていく。

・歌の伴奏には前奏を付けず「ワン・ツー・スリー・フォー」の声をかけ手拍子を打って歌う。

（ねらい）　・緊張と弛緩を体感する。

・４拍子を感じながら力を抜くタイミングを捉えることで、リズムに乗る楽しさを実感する。

吉　田　若　葉

②授業での展開

・歌を歌ったり、楽器を演奏したり、踊ったり、表現をするには、身体の緊張と弛緩のコントロールが必要である。特に子どもは、緊張しやすく力を抜くということが理解しにくいので、マリオネットをイメージして、楽しみながら緊張と弛緩を経験する活動であることを説明する。

(感想)・手拍子で歌うのが楽しかった。

・マリオネットになって、次の動きを予想するとドキドキして楽しくなった。動きが大きくなるほど楽しくなることがわかった。

・だんだん力を抜いて行くことが少し大変で、とても集中した。

・倒れる前の動きをした時、笑ってしまった。

・力の入っているところに、ふっと力が抜けていくおもしろさがあった。

・ただ力を抜いて行くだけなのに、なぜこんなにもおもしろいのか不思議だけど、とにかく楽しかった。

・楽譜を見た時は、短い歌だとしか思わなかったのに、振りが付いたらすごくおもしろくなったので、何事も工夫次第なのだと思った。

・単純すぎて、最初は、力を入れたまましていたが、力を抜いて倒れると、痛いけれど何だか楽しくなって笑ってしまった。こんな気持ちになって子どもと遊ぶことが大事だと思った。

③ビデオで示す展開

(導入の工夫)・実際にマリオネットを操り子どもにイメージをもたせる。

・楽しそうに手拍子を打って子どもたちを引き付ける。

(子どもの表現)・手拍子をしながらはずんで歌っている子もいれば、マリオネットのように手をブラブラさせて歌う子もいる。

・「かくん」とするたび笑いが出る。

・床に膝を着く時には、一瞬静かになって思いっきり崩れ必ずドッと笑いが起きる。

(表現を引き出す工夫)・最初の動作で両手を広げ筋肉を緊張させる時、ロボットをイメージするようことばかけをする。

・力を抜く瞬間に「かくん」と声をかける。

事例５．楽器への関心「テンプルブロック」

①活動内容

・よく響く箇所を打って演奏する。

(ねらい)・音のよく響く箇所を発見する。

②授業での展開

・楽器について簡単に説明してから演奏する。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）　・ブロックの切り込みの部分を打たなければ音が響かないことに気付くよう、「あれっ？」と言いながら、打ち比べる。

（子どもの表現）　・保育者の質問に対して、楽器のところまで出て必死になって楽器をさわりながら説明する子がいる。

・響く音と響かない音に対しては「きれいな音」「きたない音」と表現し、響きを聴き分けることはできるが、なぜ響きが異なるのかをなかなか気付かない。

・穴の開いているところを打つときれいな音がでることを発見するまでに保育者と子どもたちの間でずいぶんやり取りがあった。

（表現を引き出す工夫）　・打つ音を比較しながら「なんで？」と質問して子どもから発見するよう話し合いを進める。

・子どもたちの反応に共感して受入れながら次々と質問をしていく。

事例６．リズム問答「スリットドラム」

①活動内容

・スリットドラムを挟んで二人向かい合い、好きなように交互に打って、リズム問答（お話し）を楽しむ。

（ねらい）・リズムを楽しみながらコミュニケーションする。

・互いに刺激し合いながらリズムを創り出していく。

②授業での展開

・スリットドラム２組４名とテンプルブロック２組４名でリズム問答をする。

・４組が前へ出て順番に行い、リズム問答の楽しさと、友達の表現を見ることで、どのような刺激を受けられるかを感じる。

・床を叩いてリズム問答をする。

（感想）・お互いに楽しんでいた。

・リズム問答にもその人の個性を感じた。一人ひとり表現が違っていておもしろいと思った。

・相手と言葉を交わしていないのに、音を出すだけで話しているように感じた。

・手や音だけを意識するのではなく、相手の顔を見ると、リズムで話し合えると感じた。

・床でのリズム問答は、次々にリズムが出てきておもしろく、自然と笑顔になった。

・リズム感が悪くて困っていたが、リズム問答は楽しかった。
・リズム問答はすごく難しかった。リズムをいろいろ考えるのに戸惑った。しかし、スリットドラムの響きがきれいで好きになった。
・スリットドラムの音は、包みこむような優しくきれいな音だった。
・なかなか相手の目を見られなかった。
・リズムがワンパターンになってしまった。いろいろなリズムを打ちたい。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）　・「どんな音がきこえるでしょう」と想像させスリットドラムに興味をもたせる。
・目を閉じて音に集中させ聴かせる。

（子どもの表現）　・スリットドラムを打っている時も周りで順番を待ちながら見ている時も、リズムの変化にはもちろん楽しそうに反応を示すが、目はほとんど保育者の顔を見ている子が多い。

（表現を引き出す工夫）　・子どもの表現を受けて、リズム・テンポ・強弱の変化をつけて次の表現を引き出す。
・子どもの目を見て心を通わせる

事例7．歌とドラム演奏「わらいましょう」

①活動内容

・あいうえおの母音で笑う歌で、口の形と発音に注目して紙にクレヨンで、あ・い・う・え・おの口の形を描いてみる。
・コンガ・音階ドラム・ボンゴを演奏しながら歌う。

（ねらい）　・笑うイメージで楽しく母音の発音を意識する。
・リズムを唱えながらリズム打ちを楽しむ。
・ドラムを十分に叩いて楽しみ、心身を解放する。

②授業での展開

・コンガ・音階ドラム・ボンゴの演奏はしたが、「わらいましょう」の曲は用いていない。
・「太鼓による表現活動」として、絵本や歌、手作り太鼓の紹介、いろいろな活動への発展事例の紹介をする。
・自由に演奏しながら、いろいろと奏法を試して発見する。

（感想）　・太鼓を叩いているとすっきりした。
・話さなくても、楽しさを共有できると思った。
・太鼓も叩き方でいろんな音がでることを知った。

・する前には、リズムがうかばなかったが、実際にしてみるといろいろなリズムを叩くことができた。
・音楽の乗り方が人それぞれで興味がわいた。
・太鼓は自分を表現しやすいと思った。
・見て聴いているのも楽しかった。

③ビデオで示す展開

（導入の工夫）　歌：楽しくリラックスした雰囲気をつくるため、保育者は床に腰をおろして座り、子どもも保育者を囲むように近くに座る。
・「笑うときは、どんなふうに笑う？」と尋ね、「それでは先生が笑ってみます」といって歌う。
ドラム：ドラムのチューニングをしてドラムへの関心をもつようにする。
・何種類ものドラムを並べ、子どもたちの演奏意欲を刺激する。

（子どもの表現）　・保育者が歌っているときに、じっと保育者の口を見て真似ている。
・繰り返し演奏するうちに、いろいろな動作やリズムを創り出して、音楽としてのまとまりが出てきた。（ドラムのアンサンブルとして揃ってきた。）

（表現を引き出す工夫）　・「先生と一緒に歌いましょう」と誘って歌う。
・笑う時の口の形をクレヨンで描き発音に関心をもたせる。
・ドラム演奏では、曲に合わせる前に思いっきり打たせ、「ストップ」のかけ声で静かな瞬間を感じたところで、ピアノ伴奏を弾き音楽の流れに乗るようにする。

Ⅳ　ビデオ視聴後の感想と考察

１．ビデオ視聴後の感想

視聴後の感想には、特に印象に残ったことを書いているので、自分の体験と併せてビデオから学んだこととしての学生の意識を読み取ることができる。感想は、大まかに下記の６項目に分けられた。

①ことばかけについて

・子どもの表現を引き出すことは難しいけれど、ことばかけや保育者の動作、導入の工夫などで子どもの遊びが楽しくなり表現が広がることがよく分かった。豊かなことばかけができるように、日ごろからいろいろなことに興味をもって知識を磨きたい。
・子どもはどの遊びを見ても夢中で取り組んでいて、先生との会話も多く、先生との心の距離が近いと感じた。先生はいつも質問を投げかけていて、子どもたちは自分が思っている意見をどんどん発言していって活動への興味を深めていた。

・質問することによって、思いがけないことばが返ってきたり、子ども同士でいろいろな考え方を知ることができて良いと思った。
・子どもに興味をもたせるという事はとても大変だと思う。子どもへのことばかけで、質問をして子どもの意見を加えたり、子どものアイデアで遊びを発展させたりという事が大切だと改めて思った。
・保育者の何気ないことばかけが、子どもたちの意欲をしっかりとつかんで引き出しているように感じた。

②保育者の動きについて

・子どもに教えるというよりも、子どもと一緒に楽しむことを心がけなければならない。
・子ども一人ひとりとしっかり向き合い目を合わせて活動すると、子どもは嬉しい気持ちになるのではないかと思った。
・一人の子どもだけに目をむけるのではなく、子どもたち全員に目を向ける事の大切さも自分なりにビデオから学んだ。
・オーバーアクションにすることは、子どもを活動に引き付ける一つの方法だと思う。
・子どもたちは、保育者が楽しそうにしていると、目をキラキラと輝かせて自分たちもやってみたいとチャレンジしてくるのだと思った。

③集中する子どもの様子について

・歌を歌う時、子どもたちが先生の口の動きを真剣に見て覚えているのがとても印象に残った。
・ドラムのチューニングの時に、保育者がネジを締めながら「こっちへ飛んでギュッ・ギュッ・ギュッ」と言うと興味が増して集中していた。ことばのテンポもゆっくりだったので、子どもは保育者の行動（チューニングの仕方）をしっかりと記憶していると思う。
・子どもたちは、いろいろな活動をする前に、しっかりと保育者のことを目で見て、耳で聴いていると思った。その子どもたちの顔はとても真剣だった。そして活動を始めると、楽しさで笑顔になっていた。

④保育者を真似ようとする子どもの様子について

・子どもたちは、いつでも先生をじっと見ていた。先生が手を動かしたり楽器を演奏するのを一生懸命見て真似ようとしていた。
・活動の導入として保育者がまずしてみせると、説明がなくても、子どもは関心をもって、保育者と同じことをしようとしていた。

⑤素直に表現する子どもの様子について

・本当に小さなことでも子どもたちは大喜びで笑うのだと思った。

・「クレヨンのダンス」は、自分もやったように子どもたちも楽しそうだった。ビデオで見た子どもたちの楽しそうな顔、豊かな表現力を現場で見たいと改めて思った。
・ドラムを叩いている時、体でリズムを刻みながら叩いている子や笑いながら叩き続けている子など自分で工夫していて驚いた。子どもたちそれぞれに、曲やリズムの受けとめ方が違っていておもしろかった。
・子どもは思ったことをすぐ素直に話すのだと思った。
・子どもが何でも感じたことや思ったことを口に出して言っていることは、その子どもの表現を引き出すことに繋がるのではないかと思った。
・自由にのびのびとできるときの子どもは、ほんとうに楽しそうだ。
・実際に自分たちが授業でしたことを、子どもたちが楽しんでいるのを見て、やっぱり感受性が全く違うと感じた。子どもは、楽しそうに体中で音を表現していた。
・ドラムを力強く叩いていた男の子は、「ぼくはこんなにも音を出せるよ。先生見て！」と言っているような感じがした。そんな気持ちにいち早く気付いて共感できる保育者になりたいと思った。
・子どもたちが興味をもった時の反応と表情がとても好きだった。子どもの気持ちを大切にしたいと思った。
・「わらいましょう」のように、友達と笑顔を共有する活動は大切だと思った。
・授業で話された子どもの様子が、本当だったと強く感じた。特に、ボールを受け取った時の嬉しそうで温かい笑顔から喜びや楽しさが伝わってきた。

⑥活動の展開について

・少しずつ変化をつけて活動を展開していくと楽しく続けられると思った。
・子どもに考えさせることで、子どもは「どうしようかな」と迷い悩みながら自分の考えをことばや動作で表現できるようになるし、子どもの考えを取り入れることで、受入れられた喜びから信頼関係ができると感じた。
・活動を発展させることは、子どもたちの表現の幅を広げて新しい表現を生み出していくと思った。
・子どもを集中させるポイントは、みんなが楽しめるということだろうか。難しい。

２．考察

本稿Ⅳ１．において、ビデオ視聴記録の感想から、学生が自分の体験と併せて学んだこととして認識している事が挙げられた。本稿に記述した学生の意見は、一人ひとりの活動終了後に書く活動記録とビデオ視聴記録に書かれているものをまとめたものである。記述の表現が多少異なるものもあったが、だいたい学生全員から出てきた意見がまとめられている。

ビデオ視聴記録の感想は、６項目に分けられた。最も多くの学生が気付き認識したことは、「ことばかけについて」と「素直に表現する子どもの様子」であった。ことばかけでは、保育者が質問

のかたちをとってアプローチすることで、子どもの考えを引き出すことができることに気付いた学生が多い。考えるということは、創造的であるための重要な要素である。創造的であるということは、問題解決能力に優れているということでもある。最近は、受身であることが多くどちらかというと問題解決能力の未熟な学生が多い。保育者の質問に対して子どもの反応が活発なビデオの場面に、学生は新鮮な印象を受けたのだと思う。子どもたちに尋ねるということは、どんなことばが返ってきても受け止められなければならないし、横道にそれた時には軌道修正ができるような意見を保育者自身がもっていなければならないということでもある。

また、保育者の何気ないことばかけによって、子どもの意欲が引き出され表現が豊かになることに気付いた学生も多い。学生は何気ないと表現しているが、これは保育者のことばかけが自然体であったということだろうと思う。話し方のリズムや感嘆のことば、発想の転換や擬音を取り入れるなど、子どもにとって興味深く楽しいことばかけが重要であるし、子どもが常に受入れられていると感じられる雰囲気も必要である。ことばかけに関しては、表現の領域だけの問題ではないが、表現の領域での子どもの表現を引き出す創造的なアプローチの仕方については、ビデオ視聴記録の〈導入の工夫〉と〈子どもの表現を引き出す〉の項目から、学生なりに学んでいることがうかがえる。豊かなことばかけができるように、日ごろからいろいろなことに興味をもって知識を磨きたいと述べた学生もいた。

感想の項目「素直に表現する子どもの様子」で、学生は、子どもの素直な表現と全身で楽しさを表現する姿に驚きを示している。学生自身が体験している同じ活動であるだけに、子どもの感性への驚きである。子どもたちの真剣な時と笑顔の表情の差、そして子どもたちの目の輝きに感動した学生は多い。また子どもの表情に愛情を感じている学生もいて、子どもの表情を読みとる感性も育ってきているようである。

子どもの表現については、楽しさを素直に表現する様子に対して、集中する時の子どもの真剣な様子と、保育者をいつも注目している子どもが保育者を真似ようとしている姿にも気付いている。「模倣は創造のはじめ」といわれるように、真似ることは創造的な活動へ発展するものであることを、保育者は十分に認識して子どもにとって創造的なモデルとならなければならないのである。また、全ての子どもが保育者に注目しているので、全員に目を向け共に楽しみながらも、子ども一人ひとりの心と向合っていかなければならないことにも気付いている。集団と個の問題は、保育者にとっての大きな課題でもある。

授業のキーワードである解放と共感についても、十分な学びをしていることがわかる。各事例の②授業での展開の（感想）では、学生自身が十分に楽しみ解放と共感を実感していることが述べられている。ビデオからは、コミュニケーションをとるためには、子どもの目をしっかり見ることが重要であることも学んでいる。そして、子どもとの信頼関係の基に子どもの意見を取り入れながら、子どもの表現の幅を広げていかなければならないことを学んでいる。このことから、本稿Ⅲでも述べたように、子どものその子らしさは、人として不可欠なもの（安全・愛・承認を得ること）が満たされていなければならないことを、学生が感じとっていることがわかる。

おわりに

本稿Ⅳの２において、学生の学びを考察してきたが、学生が初めて見たビデオで、保育者のアプローチと子どもの表現や表情から多くのことに気付き認識できたのは、学生自身が、ビデオ視聴の前に体験し楽しさを実感した活動であったからだと思う。

授業では、本稿で紹介した事例の他にも、いろいろな内容の活動を行っている。下記の（授業で学んだこと）は授業の最後にビデオで示す事例以外の演習内容も併せて「子どもと表現Ⅰ」の授業から学んだことを128名の学生が思いつくまま自由に書いたものである。

（授業で学んだこと）

・音楽で表現する楽しさ（50名）
・リズムや歌、楽器など音楽に合わせての表現方法（44名）
・子どもと同じ目線にたち、子どもの表現を受け入れ共感することが大事（40名）
・恥ずかしい気持ちをなくして楽しむ（33名）
・ビデオ視聴で子どもの表現の様子を知った（32名）
・自分がまず楽しむこと（31名）
・表現は人それぞれで一人ひとり違う（30名）
・グループでいろいろな人とかかわることが楽しく成長できた（28名）
・保育者は子どものモデルとなるので、身振り・表情・声・ことばかけに気をつける（25名）
・子どもと同じ体験をして子どもの気持ちを実感した（25名）
・素直に表現する大切さ（23名）
・子どもと同じ体験をして子どもの気持ちを実感した（25名）
・子どもの意欲を引き出すことが表現を引き出すこと（17名）
・自分自身の表現を創造豊かにする必要性（13名）
・自然の音を意識して心を動かすことの大切さ（11名）
・音楽は心を解放する（11名）
・創意工夫をすること（10名）
・表現は、感性・意欲・共感・豊かな創造性を育てる（10名）
・活動記録を書くことで、新しい自分を発見できた（９名）
・共感の楽しさ（６名）
・子どもの呼吸を感じることの大切さ（５名）
・子どもの表現は環境によって影響を受ける（５名）
・保育者も子どもと共に成長できる（５名）
・聴くことの大切さ（４名）
・保育者の活動には必ずねらいがある（４名）
・保育者自身がしっかりとした考えをもっていなければならない（４名）
・音楽は子どもの創造性を養うのにとても役立つ（１名）

・音楽は子どもの感性を養う（１名）

・柔軟性が大事（１名）

以上が、学生が授業から学んだと感じていることであるが、本授業においては、教授要目に示した「子どもと共感できる保育者を目指しながら保育者としての役割と援助について学んでいく」ねらいと、授業のキーワードの創造性・解放・共感・楽しさの実感に関しての意識付けは、だいたい達成したと考えている。そして探求的姿勢に関しては、全ての授業と実習を通して培われていくと考えている。「子どもと表現Ｉ」の授業は１年前期なので、本授業での学びは、特に２年前期まで行われる保育園と幼稚園実習での実践を通して更に深めて欲しいと願っている。今後も、学生の実態を見極めながら、教授内容を工夫し探っていきたいと考えている。

引用文献　参考文献

（註１）吉田若葉『北陸学院短期大学　紀要第35号』P. 89～P. 92　2003

（註２）北陸学院短期大学『教授要目』P. 55　2004

（註３）吉田若葉『北陸学院短期大学　紀要第35号』P. 90～P. 92　2003

（註４）幼稚園教育要領　第１章総則　２幼稚園キリスト教育の目標（5）P. 2　平成10
保育所保育指針　第Ｉ章総則　１保育の原理(1) 保育の目標　カ　P. 5　平成12

（註５）Ｍ・ジェイムス／Ｄ・ジョンウォード　本明寛／織田正美／深沢道子＝訳
『自己実現への道』P. 22　社会思想社　1990

（註６）Ａ．Ｈ．マズロー　小口忠彦訳　『人間性の心理学』　P. 196～P. 199
産能大学出版部　改定1995

（註７）ダニエル・ゴールマン　土屋京子訳　『ＥＱこころの知能指数』P. 154～P. 159
講談社　1996

（註８）ダニエル・ゴールマン　土屋京子訳　『ＥＱこころの知能指数』P. 160～P. 161
講談社　1996